第一三二回京都大学書道部学外書展

冬将軍展

場所：京都文化博物館六階

日時：二〇二四年二月一〇日(土)
一〇時～一七時

二月一一日(日)
一〇時～一六時

※入場は三〇分前まで

巻頭に寄せて

京都大学書道部　部長　植村亮

温故而知新（故きを温ねて新しきを知る）。最近、歴史を学ぶ一人としてこのことの重要性をしばしば実感する。世界情勢が荒れ始めている中、その状況を冷静に見るために「正しい」歴史認識を持つことが必要になってきた。「事実は小説より奇なり」などとも言うが、実際学んでいると歴史事実として面白い部分はそこまで多くないと（自身の興味に依るのかもしれないが）。そのために一定数ロマンの多い解釈をしてしまう人がいる。しかしこのような解釈は自身の視点を歪ませることがある。だからこそ過去を正しく認識することで冷静な視点が担保される。

一方書道においても「温故而知新」というのは重要だといえる。「温故」というのは書道で言えば臨書にあたる。臨書を繰り返すことで基礎が文字通り身につく、体が覚えてくる。そこから更に様々な書家の作品を臨書し、その書風を身につける。このように基礎を身につけることにより書の新たな可能性を生むことが出来ると私は考えている。また「温故而知新」は論語の一節であるが、全文は「子曰、温故而知新、可以為師矣。（子曰く、故きを温ねて新しきを知る、以て師と為るべし。）」である。私自身「師」になるつもりはないが、そう呼ばれるほどの腕はほしい。そのためにも臨書を繰り返すしかないのだろう。

最後になりますが、これまでと異なる会場での開催となります。無事に開催できるのは、顧問の成田先生と行友三輪子様、技術顧問の大原蒼龍先生をはじめとする多くの方々のご支援によるものであり、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

そして、皆さま本日は第一三二回京都大学書道部学外書展冬樟展の作品を見に来てくださり、誠にありがとうございます。部員一人一人が思いを込めて書いた作品を、どうぞごゆっくりとご覧になってください。

グループ展に挑戦しませんか？

（書道部ＯＧ・京都大学附属図書館研究支援第二掛主任）　行友　三輪子

京大書道部では、年二回の書展に加え、京都大学の学園祭でも書展やパフォーマンスを行っています。それだけでも大忙しですが、私は三回のグループ展を開きました。より個人の力が試され、仲間で濃密な時間を過ごせるグループ展。開催までの流れをご紹介します。

①メンバーの選抜

初めてなら五人程度がやりやすいです（会場の広さによりますが、五人なら一人あたり三作ほどを出品）。人数が減ると一人あたりの出品数が増えます。

②テーマの決定

何でもＯＫです。私の時は、各自が好きな書家を一人選び、生涯や書風をまとめた解説を作成し、臨書と創作を書くことにしました。

③会場・会期の決定

会場候補を探し、搬出入日を含めて一週間借りる想定で費用を計算してみましょう。二尺八尺の大型作品を書きたい場合、会場の高さも要確認です。

④作品制作・合評

定期的に集まり、作品を見せ合って意見交換するのがお薦めです。

⑤宣伝

グループ展の名前を決め、ポスターやはがきを作成・配布します。会場へも、事前に校正をお願いするとよいです。

⑥会場設営

作品の配置を決め、解説パネル等とともに設置します。必要なら、芳名録やアンケートも用意します。

⑦開催当日

会場に二人前後がいるよう、シフトを組みます。グループ展はお客様との距離が近いので、ぜひ声を掛けておもてなししましょう。

私が一番苦労したのは、やはり④でした。会場にはあまりこだわらなくて大丈夫です。身も蓋もない言い方ですが、グループ展に足を運んでくださるお客様は、八割が身内です。もっと気楽に、自分らしさを爆発させるつもりで挑戦してみてください！

最後になりましたが、一身上の都合により、三月末をもって顧問を引退いたします。卒業後も部員の皆様を近くで応援でき、嬉しかったです。京大書道部の今後益々の発展をお祈り申し上げます。

「師　古谷蒼韻」

大原蒼龍（技術顧問、日展会友　書家）

本年、六月十八日（火）～二十三日（日）京都文化博物館にて「生誕百年古谷蒼韻展」が開催されます。

大正十三年生まれ。平成三十年、令和の声を聞く事なく九十四歳にして書作家人生に幕を閉じました。翌平成三十一年のホテルグランヴィア京都で行われた「お別れの会」の時、同年の尾崎邑鵬先生がスピーチの冒頭で「巨星堕つ。」といわれた言葉が今でも耳に残っています。

まさに昭和・平成を代表する書家であり、日本を牽引した指導者としても際立った先生でした。また、人格者としても高く評され、書の分野に限らず今でも尊崇の念を持つ方が多くいます。

指導においては、とにかく厳しい先生でした。兄弟弟子のなかには、京都の稽古場の近くまで来ると胃が痛くなり、耐えきれずに四国まで引き返した方もいました。書作品のみならず、礼節や書作家としての生きた方にまで身をもって指導されました。私も稽古場の内外で毎回のように喝破されたものです。これ以上やれば身体が壊れるという勉強や努力を重ねた作品を持っていっても、「なんや、そんなもんか。」と。

先生の指導の言葉の一端を紹介します。

血みどろになって臨書せい

書の美の坩堝に頭まで浸からなあかん

その一本の線に責任が持てるんか

踵を正して古典の前に跪け

弟子に対して以上に、いや、数倍をも自分自身に厳しい姿勢を持っておられました。私の中でその姿は、比叡山の千日回峰行を想起させるものでした。

八〇歳を過ぎて、「この姿勢で書けば良い線が出せる。」という姿勢を続けて制作されていた所、肋骨の一箇所が折れてしまったそうです。痛みに耐えながら、「しゃーないから、そのまま書いたんや。」との制作秘話を聞いた時も、凄まじい先生だと感服したものです。

王羲之の重要性を説かれ、書の王道というものを常に意識されていました。また、書道史の流れの中に身を置き、古典に対し同じ目線で対峙され続けました。

書道の歴史は三千数百年という悠久の歴史と大いなる流れがある。君は、その流れの一点である。という事を自覚せなあかん。

先生の教えは、禅的な深淵さがあるように思えます。全神経を研ぎ澄まし、肌で感じようとしなければ、その教えの真意を掴む事は難しいものでした。幸運にも、院生の時代と先生の晩年に書生としてその謦咳に接する事が出来ました。その教えを受けた者として、浅学菲才ではありますが、京大書道部や後進を指導育成していきたいと念じています。

「生誕百年古谷蒼韻展」には、幾度も足を運んでもらい、何かしらを感じ取って欲しいと願っています。

作品制作の方法―臨書と創作―

臨書

歴史上の優れた書の古典を手本として、それを真似て書くことを臨書と言います。書道の学習で最も基本となる方法で、伝統的には次の三つの段階を踏むのが良いとされます。

(1) **形臨**　文字の形や筆遣いを似せて書くことです。古典をよく観察し、できるだけ古典に近づけて書くことが学習の出発点となります。

(2) **意臨**　形に拘らず、古典の雰囲気や精神を汲み取って書くことです。意臨が重視されるのは、形だけを追っていると時に筆運びのリズムが失われ、浅い印象の書になってしまうことがあるからです。また、古典の中には模本（敷き写し）や拓本（石に刻し、それを墨で写しとったもの）だけが残り、元の姿が伝わっていないものもあります。そのようなものを臨書する際には、想像力を働かせて書くことが必要です。

(3) **背臨**　古典を見ずに、記憶を頼りに再現して書くことです。古典をいかに観察し、理解しているかが問われます。

形臨、意臨、背臨と進むにつれて、臨書には書き手の個性が強く現れるようになります。臨書は単なる模倣ではなく、一つの表現方法なのです。臨書作品は、そのような学習の成果を作品として形にし、発表するものです。

臨書の対象となる古典が載る冊子を法帖と言います。初めから芸術作品として制作されたものもあれば、石碑や手紙、文章の下書きなど、実用的な目的で書かれたものもあります。

京大書道部の書展では、臨書作品の場合キャプションに臨書した法帖を掲示しています。ぜひ作品と見比べてご覧ください。

創作

臨書に対して、自分が表現したい言葉を書くことを創作と言います。自分で考えた言葉を書くこともあれば、漢詩や漢文、和歌や俳句、詩や短歌、歌詞などに題材を求めることもあります。

作品の構成や書体、書風は、選んだ言葉を最もよく表現できるように考えて工夫します。臨書の学習を活かし、古典の表現方法を取り入れると、作品に深みと味わいを出すことができます。

闇雲に言葉を書くのではなく、自ら感動や想いを言葉に託し、それに合った表現を探して書くのが創作作品です。

作品の構成―印と落款―

落款

作品の末尾に書く署名とそれに続けて押す印を落款・落款印と言います。名前のほか、語句の出典や臨書した古典の名、製作した場所や時間を書くこともあります。

印の種類

落款印以外にも、作品の右上（冒頭部分）に押す引首印や、自由な位置に押す遊印が加えられることがあります。

書の分野と有名古典について

漢字には楷・行・草・隷・篆の五つの書体があります。数千年前に、身の回りの事物を書き記さんとする行為によって象形的な篆書が生まれ、文字としての美しさや抽象性、実用性を求める中で隷書が発展しました。現代でもよく使われている楷書・行書・草書はこの篆書と隷書を基盤として作られた書体です。一方で、仮名・調和体は、日本が中国から漢字を輸入し独自に書法を発展させてきた結果生まれた書の分野と言えます。

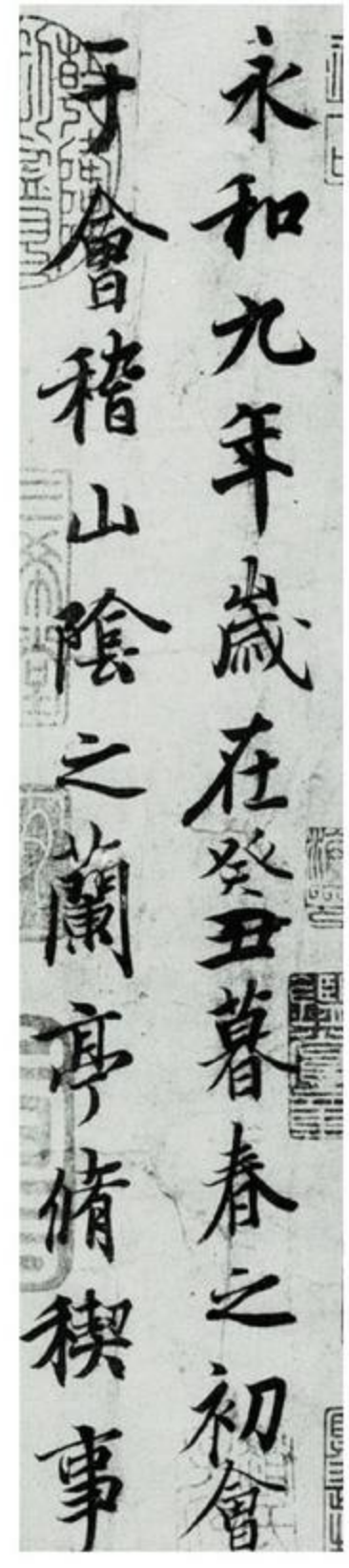
一口に〇書と言っても、書く者の呼吸や心の動き、如何なる結体を良しとするかという考え方や経験などによって、その書が持つ趣は変化します。そこに書の面白さや芸術性が在るのではないでしょうか。ぜひ以下の有名な古典や色々な作品などを見比べて、その面白さを体験してみてください。

「楷書」は永字八法と呼ばれる、点・画・転折・払いに関する一定の規則によって書かれる書体です。その書法は唐代に完成され、堂々たる威厳と流麗な美しさを併せ持つ素晴らしい古典が多く残されています。

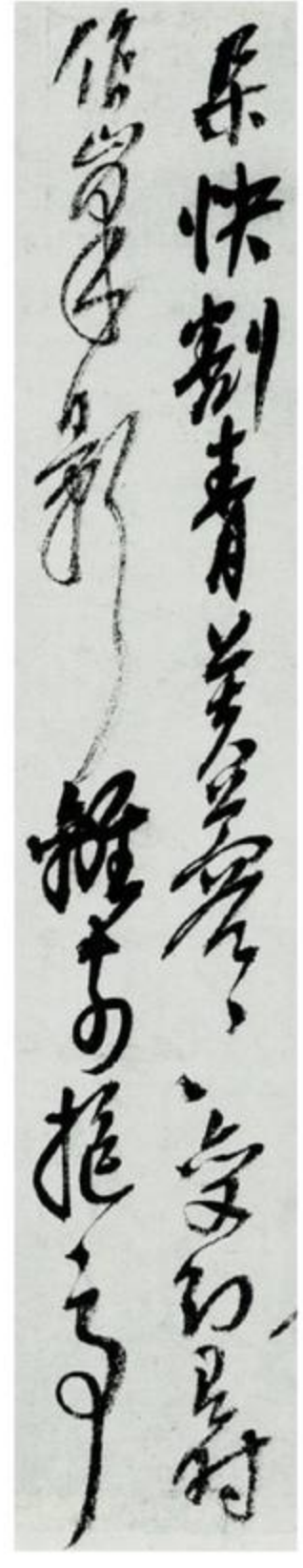


画像：九成宮禮泉銘（欧陽詢）

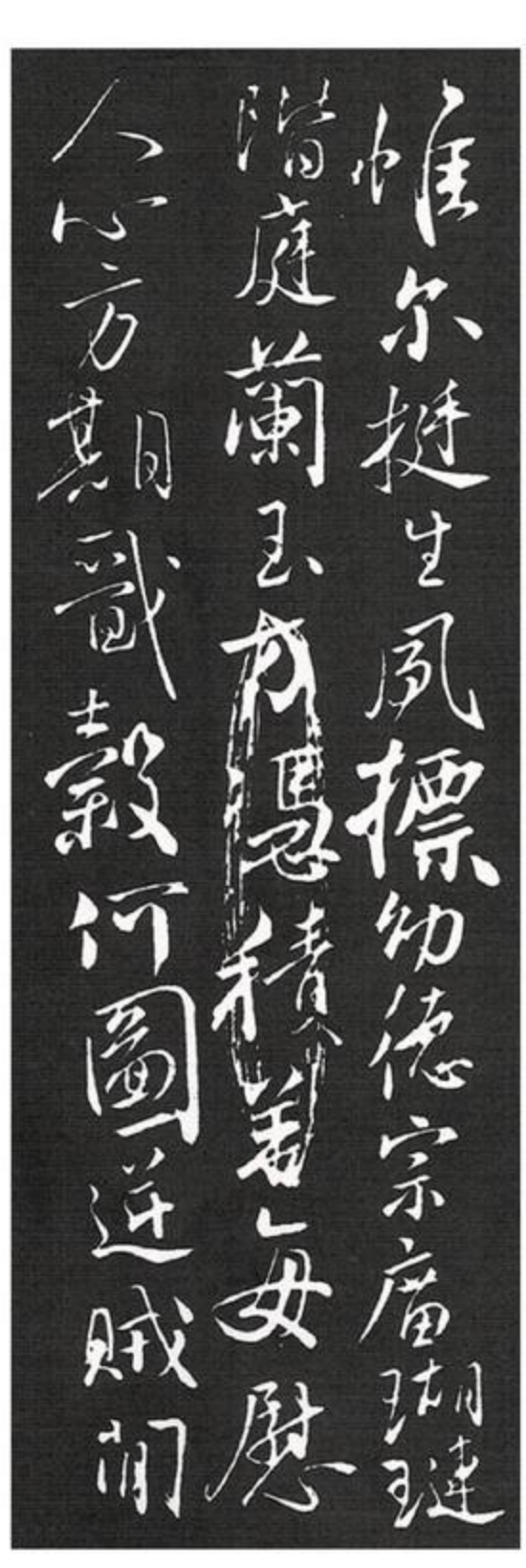
「行書」は一般的に隷書の速書き体として生まれたと言われており、点画を繋げたり省略したりして書かれる書体です。崩し方はさまざまで、曲線を軸とした流線的な書風もあれば、直線を軸とした力強い書風もあります。



画像：蘭亭序（王羲之）



画像：詩稿（呉昌碩）

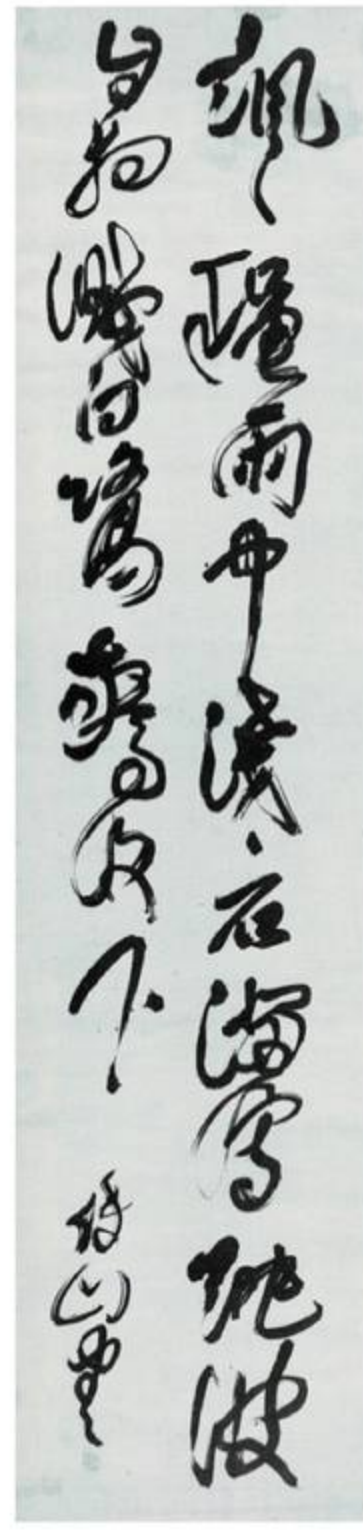


画像：祭姪文稿（顔真卿）

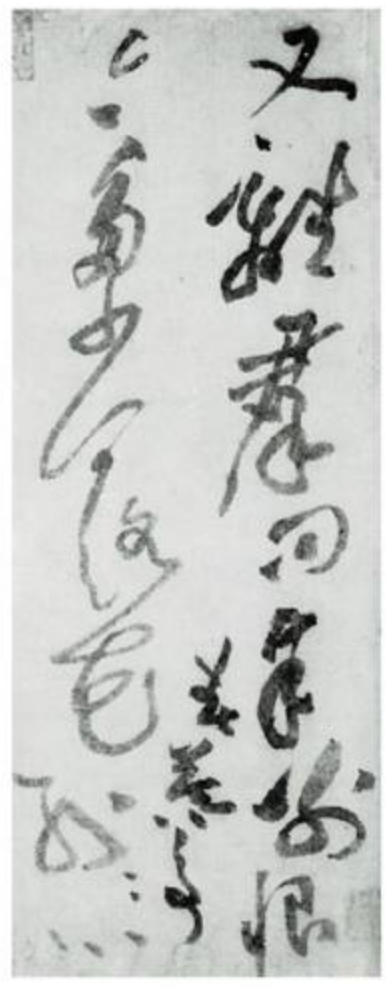
「草書」もまた隷書の速書き体として、漢代に起こった書体です。唐代までに一定の崩し方が確立された後、宋から明・清にかけて、その自由度の高さに表現性を見出した能書家らによって芸術性が高められました。



画像：十七帖（王羲之）



画像：五言絶句四屏（傅山）

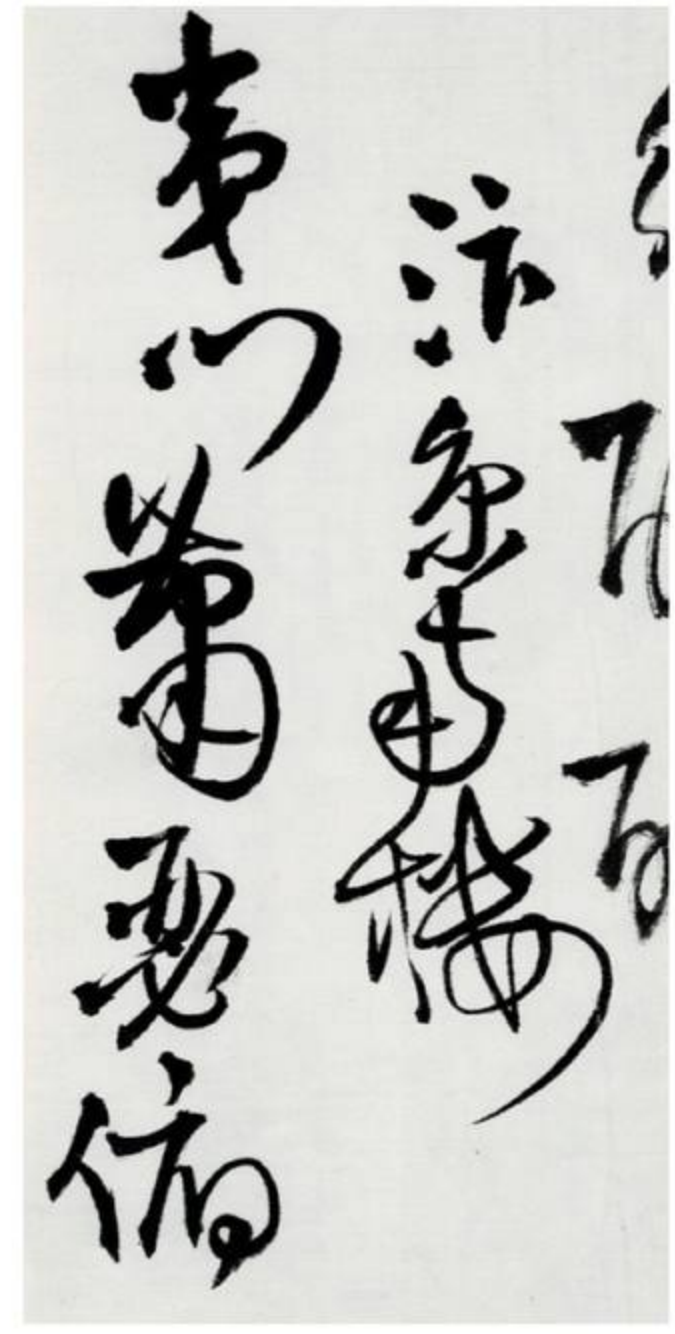


画像：李太白憶旧遊詩巻（黄庭堅）

「隷書」は篆書から発展し、五体の中で唯一「波磔」と呼ばれる払いのような横画を持つ書体です。文字として整えられつつも篆書の象形的な字形が残っており、筆法もまだ習熟していない段階ともいえますが、かえってそこに造形美と素朴な古籀の風味を併せ持った魅力を見出すことができます。



画像：曹全碑（筆者不明）



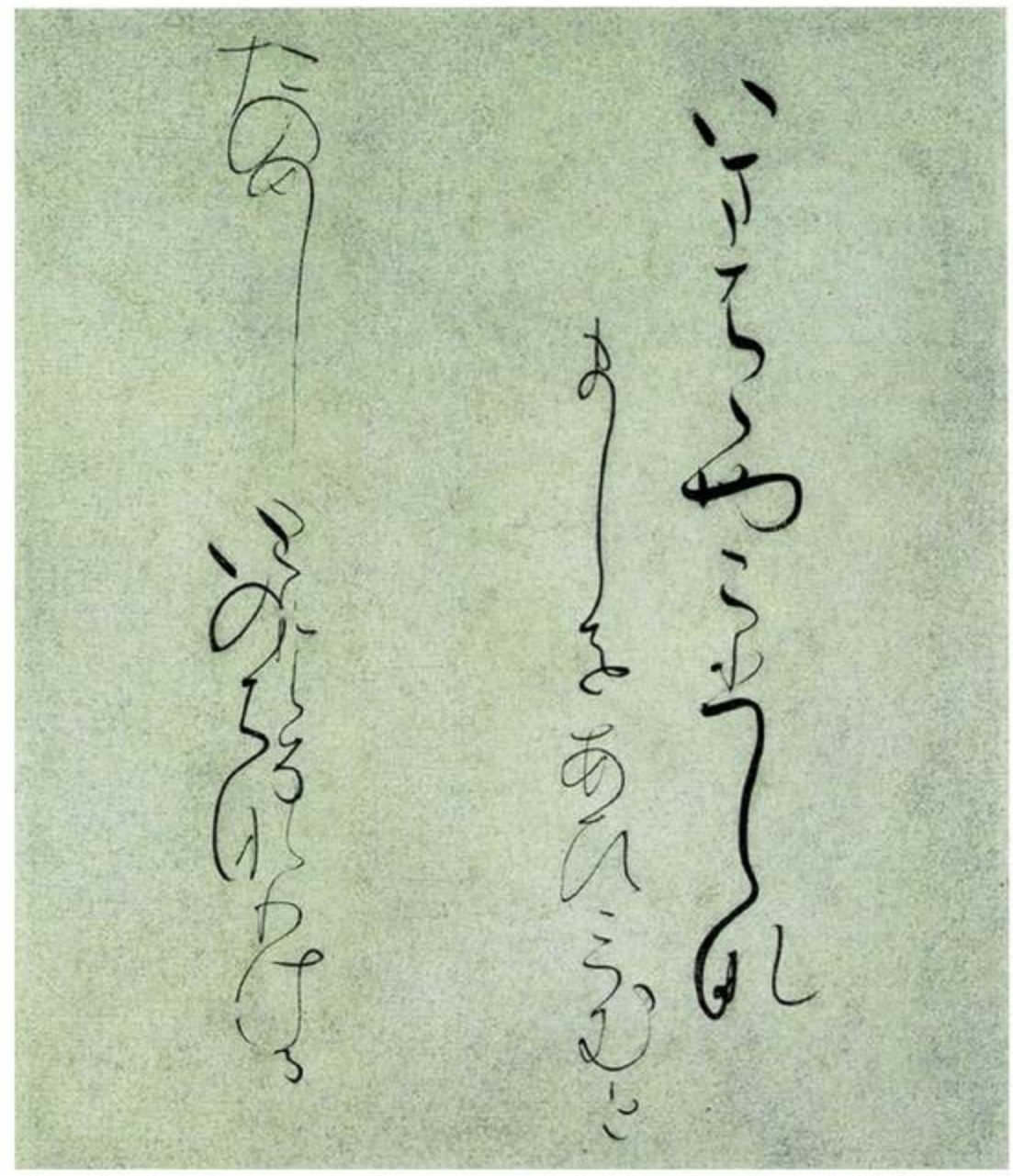
画像：草書七律五首巻（王鐸）

「篆書」はその絵的な造形に特徴がある最古の書体です。世界に存在する事物と文字とを初めて繋げた記号であり、その字形から想起されるイメージによって、豊かな表現性を持っています。漢字の意味を知らない人にも魅力が伝わる作品を書くことができます。



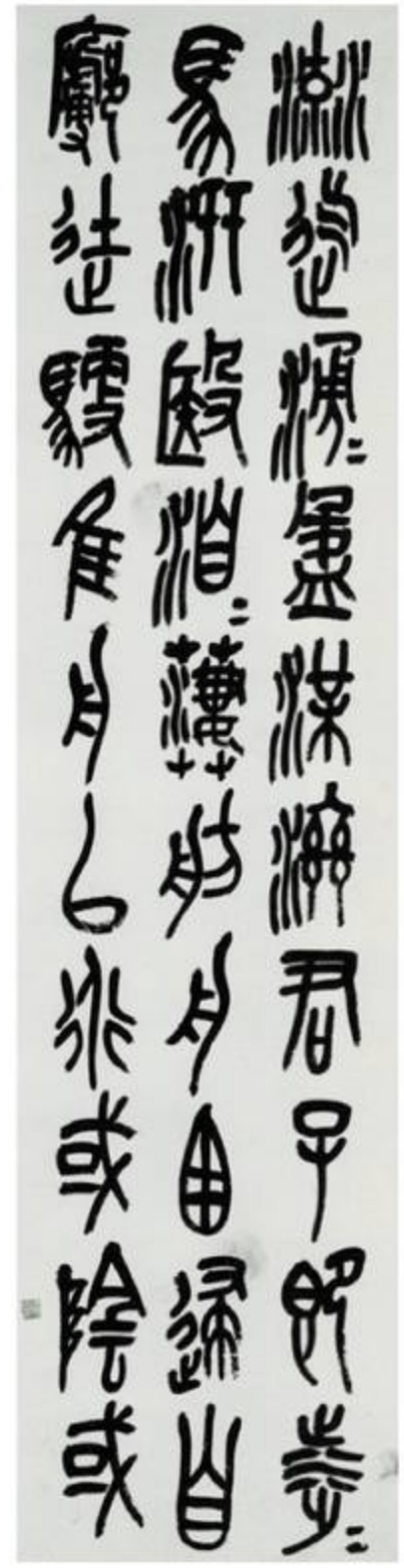
画像：石鼓文（筆者不明）

「かな」は日本語の音を割り当てた漢字の一部を変化させて作られた、日本固有の書法です。柔らかく流れのある運筆が特徴的で全体に寛雅な雰囲気を持っています。散らし書きという独自の構成法も漢字書には無い魅力の一つです。



画像：升色紙（伝行成）

「篆刻」は篆書を彫ったものです。篆書は漢字の最も古い書体で、絵的な造形に特徴があります。



画像：臨石鼓文（呉昌碩）

「調和体」あるいは**「近代詩文書」**は戦後に一般的な可読性を重視する動きによって起った書法です。文学作品や詩・短歌・俳句、歌詞やセリフといった題材を用いるので、文意を加味した文学性のある、また書道をしていない人にも親しみやすい作品を作ることができます。（著作権が気になるので画像はありません）



画像：自書七言絶句十二屏（傅山）

作品一覧

個人作品

一回生

岩﨑沙奈　創作・『松高白鶴眠』……12
影山稜真　臨書・『穠芳詩帖』……13
　　臨書・『風信帖』……13
加藤杏次郎　臨書・『乾坤惟此五言詩軸』……11
川上雪乃　創作・『冬』……13
　　創作・『鏡花縁　ー異国巡りの物語ー』……14
妹尾直弥　創作・『冬夜』……15
中野花音　臨書・『古四種巻』……16
樋口珠穂　創作・『平家物語』……17
松田陽南子　臨書・『多宝塔碑』……17
吉田慎二郎　臨書・『張玄墓誌銘』……18

二回生

植村亮　臨書・傅山『草書千字文』……12
　　臨書・『直江状』……13
松阪明日香　創作・『幽居』……17
松岡加純　臨書・『礼器碑』……18

三回生

淺雛穂乃花　創作・『百人一首』……12
木村隼翔　臨書・『玄秘塔碑』……14
城本昌明　創作・『登樓』……11
須田光太郎　創作・『春たてるに寄するうた』……15
鶴岡直穂　臨書・『鄭盧　楊巨源・酬于駙馬』……18

四回生

飯田のぞみ　臨書・『風信帖』……12
倉橋あい　創作・『贈花音』兼『直心是道場』……14
凌楡凱　臨書・『粘葉本和漢朗詠集　慶賀』……16
髙石京花　創作・『さよなら京都　鴨水春風』……15
戸髙海　創作・『正気歌』……16
乘杉玲壽　創作・『流転』……16
凌楡凱　創作・『落雨嗩花壇』……17

五回生

近藤　毅　創作・『過渡』……18

修士一回生

乾未樹　創作・『花を惜しむ』……19

修士二回生

柴田達哉　創作・『追憶』……14
渡部裕貴　創作・『月夜見梅華』……18

合作

妹尾直弥（一回生）、齋藤亜紀（二回生）、戸髙海（四回生）
　臨書・張瑞図『飲中八仙歌』……22
加藤杏次郎（一回生）、中野花音（一回生）、妹尾直弥（一回生）
　創作・『萬楚　五日觀妓』……22
木村隼翔（三回生）、城本昌明（三回生）、須田光太郎（三回生）
　創作・『歳月不待人』……21
妹尾直弥（一回生）、松田陽南子（一回生）
　臨書・陳淳『七言律詩幅』……21
植村亮（二回生）、齋藤亜紀（二回生）、永田はるな（二回生）、松阪明日香（二回生）
　創作・『孤月照寒泉』……21
岩田恵理子（修士二回生）、乗杉玲壽（四回生）
　創作・『牡丹』……20
浅山桃佳（三回生）、淺雛穂乃花（三回生）、大林明日香（三回生）、鶴岡直穂（三回生）、二宮海椰（三回生）
　創作・『譜莉九亜伍』……20
影山稜真（一回生）、加藤杏次郎（一回生）、川上雪乃（一回生）、鈴木理仁（一回生）、
樋口珠穂（一回生）、福田朗子（一回生）、松田陽南子（一回生）、吉田慎二郎（一回生）、妹尾直弥（一回生）、中野花音（一回生）
　創作・『漢字しりとり』……20
岩田恵理子（修士二回生）、服部佳乃子（修士二回生）
　創作・『題安成李氏秀野亭』……19
加藤杏次郎（一回生）、植村亮（二回生）、城本昌明（三回生）、乗杉玲壽（四回生）
　創作・『四四字熟語』……19
植村亮（二回生）、山田健太（二回生）

臨書・『高野切』……
加藤杏次郎(一回生)、凌楡凱(四回生)
創作・『二等分の五月』……
加藤杏次郎（一回生)、妹尾直弥（一回生)、中野花音（一回生)、松田陽南子（一回生)、吉田慎二郎（一回生)
臨書・張旭『草書古詩四帖』……
乗杉玲壽(四回生)、戸髙海(四回生)
創作・『二君子図』……
飯田のぞみ（四回生)、石田あかり（四回生)、大西沙穂（四回生)、岡雅博（四回生)、倉橋あい（四回生)、高石京花（四回生)、戸髙海（四回生)、
乗杉玲壽（四回生)、凌楡凱(四回生)
創作・『卒業記念』……
石田あかり（四回生)、倉橋あい（四回生)、戸髙海（四回生)、乗杉玲壽(四回生)
創作・『四人文殊』……
岡雅博（四回生)、戸髙海(四回生)
創作・『秋冬仮名合作』……
南出祐希(三回生)、永田はるな(二回生)、結依(二回生)
創作・『山月記』……
永田はるな(二回生)、山田健太(二回生)
臨書・董其昌『邠風図詩巻』……
乾未樹(修士一回生)、釜田弘一朗(五回生)、近藤毅(五回生)
創作・『極娯遊』……
凌楡凱(四回生)、須田光太郎(三回生)
創作・『花下對詠』……
パクジヨンと有志
臨書・『九成宮醴泉銘』……

賛助作品

技術顧問　大原蒼龍　先生
創作『微妙玄通』　半切
王羲之　米芾を根底に持ち、自然な気持ちの流露を願った。

個人作品

1

加藤杏次郎　一回生
臨書　草書　『乾坤惟此五言詩軸』　二六
一盞酡雙白」

「乾坤惟此事　不論古于今　一盞酡雙白」
「乾坤」とは、天と地、陰と陽、月と日など対となるものを表す言葉なんですね。はい。





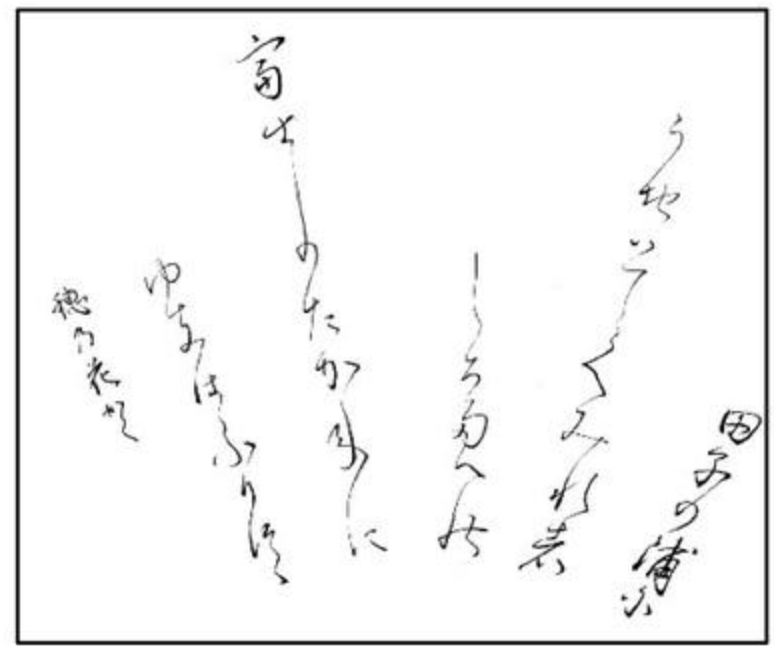
2

城本昌明　三回生
創作　篆書　『登樓』　二六
「花近高樓傷客心　萬方多難此登臨　錦江春色來天地　玉壘浮雲變古今　北極朝廷終不改　西山寇盜莫相侵　可憐後主還祠廟　日暮聊爲梁甫吟」
三国志の蜀の都であった成都で杜甫が作った漢詩です。



3

淺雛穂乃花　三回生
創作　かな　『百人一首』　色紙



「田子の浦に　うち出でて見れば　白妙の　富士の高嶺に　雪はふりつつ」
二月の書展ということで、季節に合わせて冬の和歌を選んでみました。雪と富士山という、いつの時代でも幻想的で特別だと捉えられるだろう風景を想像すると、なんだか幸せな気分になります。

4

飯田のぞみ　四回生
臨書　行書　『風信帖』　半切



5

岩﨑沙奈　一回生
創作　草書　『松高白鶴眠』　半切

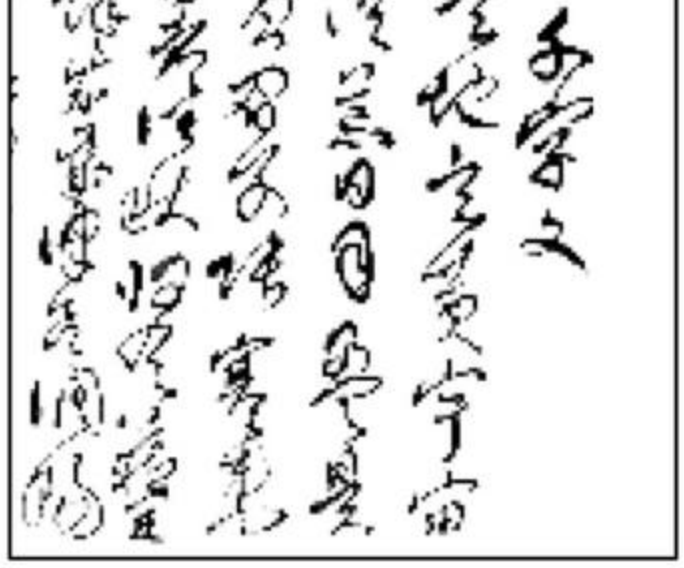
「松高く白鶴眠る。」
いつも季節ものの創作してるので今回はお正月にしてみました。まだですが。



6

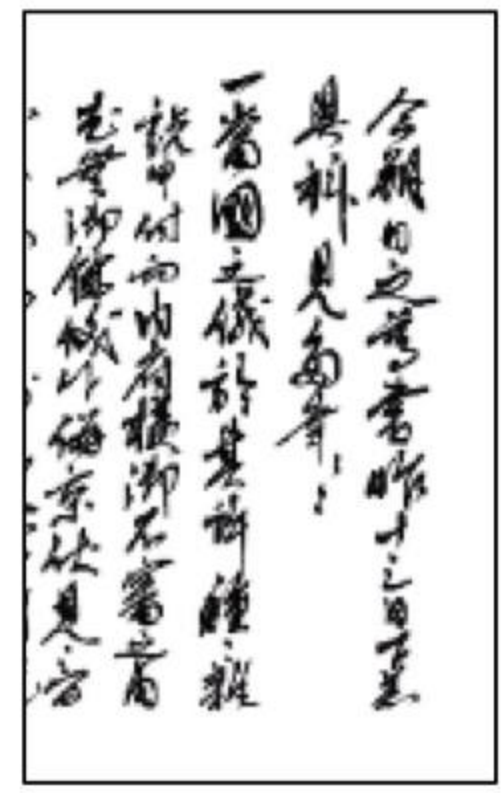
植村亮　二回生
臨書　草書　『臨傅山草書千字文』　巻子

「天地玄黄宇宙洪荒日月盈昃辰宿列張寒來暑往秋收冬藏閏餘成歳律呂調陽・・・」
傅山の草書を身につける。



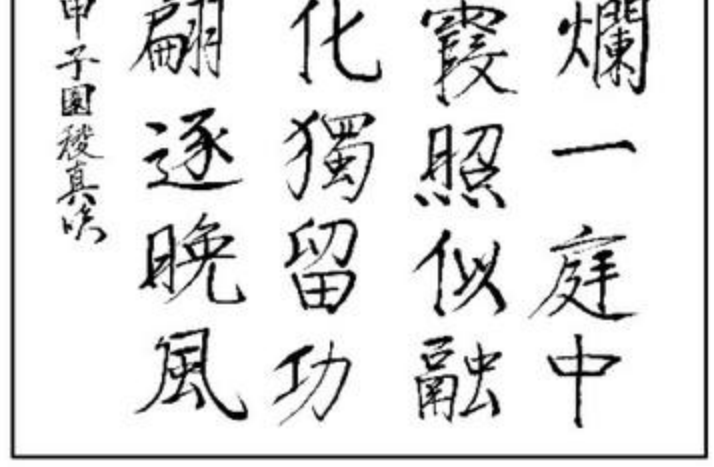
7　植村亮　二回生
創作　行草　『直江状』　巻子

「今朔尊書昨十三日下着具拝見、多幸々々。……」
ずっと書きたかったことが実現しました。



8　影山稜真　一回生
臨書　行書　『穠芳詩帖』　全紙

「穠芳依翠蓴煥爛一庭中零露霍如醉残霞照似融丹青難下筆造化獨留功舞蝶迷香徑翩翩逐晩風』



他には見ない鋭い筆致に一目惚れして、書きたいと思いました。また、長落款にも初めて挑戦し、本文の鋭い楷書よりの雰囲気との対比によって、紙面全体が引き締まるように意識しました。

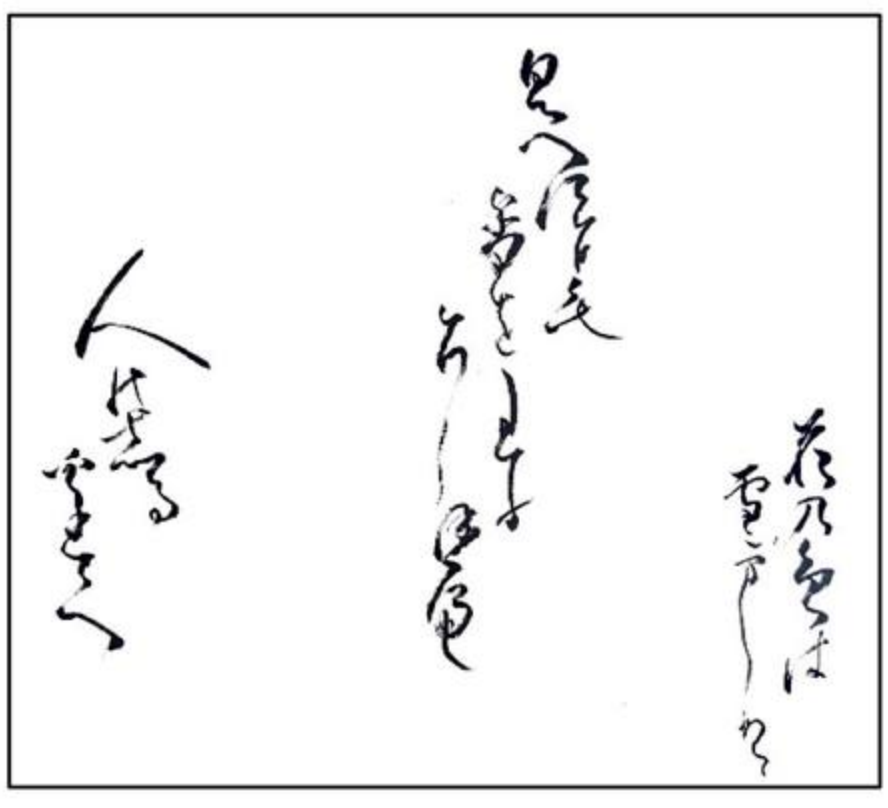
9　影山稜真　一回生
臨書　行草　『風信帖』　半切

「風信雲書自天」
東寺の宝物館で期間限定公開されていた風信帖を見に行ったので、せっかくなら書いてみようかなと思いました。半切二行でよく見る作品ですが、今回は一行にして風信帖の整然とした美しさを際立てたいと思い、この構成にしました。



10　川上雪乃　一回生
創作　かな　『冬』　全懐紙

「花の色は雪にまじりて見えずとも香をだににほへ人の知るべく」
「白梅よ、花の色は雪にまざって見えないとしても、せめて香だけでも匂わせよ、人がそれと気づけるように」という意味の和歌で、作者は小野篁です。

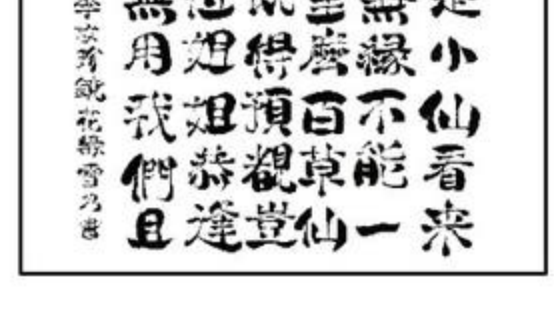


11

川上雪乃　一回生
創作　行書　『鏡花縁　ー異国巡りの物語ー』　全紙

「百花仙子道仙姑初見固是小仙看來即使所載意是巾幗設或無縁不能一見豈非鏡花水月終虚所望麼百草仙子道這泓是象我們今日既得預覩豈是無縁大約日後總有一位姐姐恭逢其盛此時渺渺亡亡談也無用我們且去赴会何必只啞迷見魁」

中国清代の長編小説『鏡花縁』の冒頭部分です。罪を得て俗界に降ろされた百花仙子達の様子が描かれています。



12

木村隼翔　三回生
臨書　楷書　『玄秘塔碑』　半切



「慈悲定慧佐如来以闡教利生」

定慧を運らすほど、「戎」を持って生活をしていないので、まずは悲しみを取り除き、幸福を与えようという心を持ちたいと思います。

13

倉橋あい　四回生
創作　行書　『直心是道場』　半切



「直心是道場』

まっすぐに生きたいですね。

14

近藤毅　五回生
創作　調和体　『過渡』　全紙1/2

「ガナリ立てる高架を浴びて僕は今生まれ直す」

ガード下とか、すぐそばで轟音を浴びた時のちょっとトランス的な感覚を紙に落とし込んでみようと挑戦しました。自詠詩です。



15

柴田達哉　修士二回生

創作　隷書　『追憶』　半切

「豊年農夫織婦百工戴恩縣前以河平元年遭白茅谷水災害退於戌亥之閒興造城郭」

「人生初書展である平成三十年度の冬樟展で臨書に選んだ箇所を、これまでの書道部での思い出に耽りながら自由に書き上げる、という自己満コンセプト。最後の作品になる説濃厚なので出来るだけ頑張りたいです。」

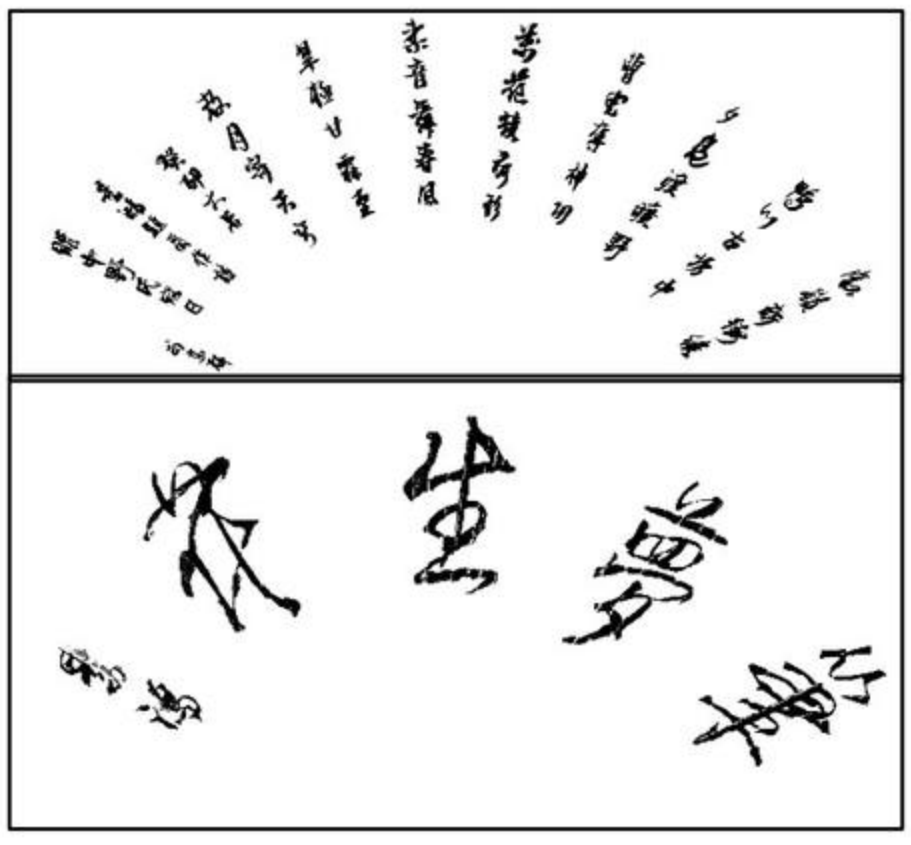
16

凌楡凱　四回生

創作　行書　『贈花音』兼『鴨水春風』　扇子

「(詩文の面) 叡嶺新街繞　鴨川古坊中　夕鳧横曠野　曹字奪神功　萬化競其彩　柔音舞和風　極荒甘雨至　敖月寄天穹」

友人に送った扇子である。自分の気持ちと人生への考えをうまく改造し、友人への祝福として使い、繊細な字で書いてみた。もちろん素鴻だから中古音にこだわっている自作漢詩である。自分の繊細な気持ちと、友人への誕生日祝福の二重の意味をもつ詩なので、非常に面白い構成となっている。内容も非常にこだわっている！ぜひご品読頂ければ幸いである。



17

須田光太郎　三回生

創作　かな　『春たてるに寄するうた』　全懐紙

「難波津に咲くやこの花冬ごもり今は春辺と咲くやこの花・こころざしふかく染めてし折りければ消へ敢へぬ雪の花と見ゆらん・霞立つ春の山辺は遠けれど吹きくる風は花の香ぞする・あらたま　の年たちかへる朝よりまたよるものは鶯の声・東風吹かば匂い起こせよ梅の花あるじなしとて春な忘れそ」

立春に合わせて、冬から春へうつる時期の和歌を五首寄せて書きました。少しルンルンな作品です。



18

妹尾直弥　一回生

創作　調和体　『冬夜』　全紙1/2

「底冷えのする夜の街を泳ぐ」

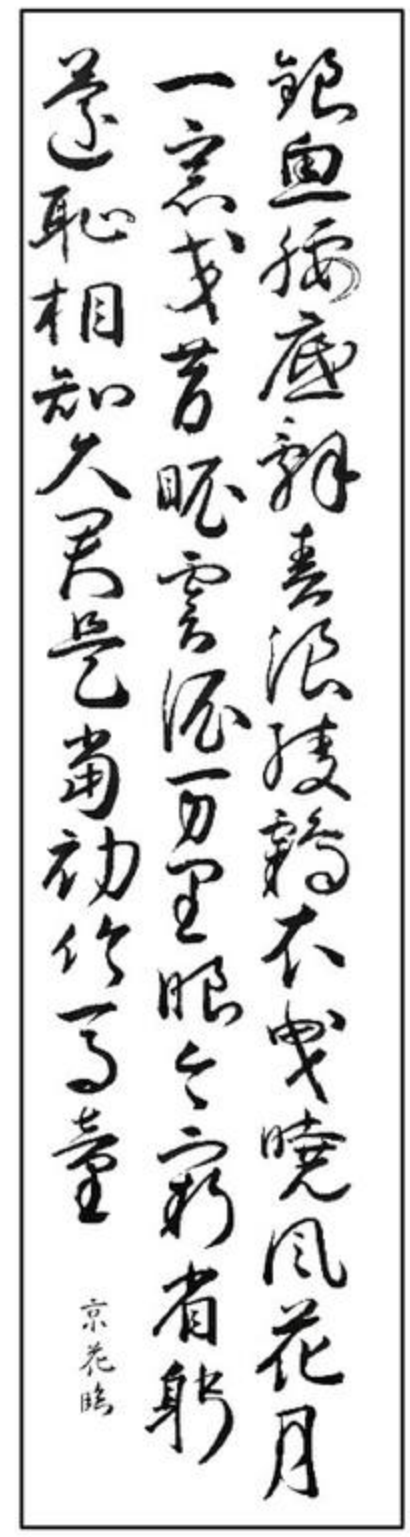
寒くても、夜の街を歩くのが好きです。

19

高石京花　四回生
臨書　草書　『粘葉本和漢朗詠集　慶賀』　半切

「銀魚腰底辞春浪、綾鶴衣間曳暁風。花月一窓交昔眛、雲泥万里眼今窮。省躬還恥相知久、君是当初竹馬童。」

二回生の時に書いた作品に再挑戦しました。和漢朗詠集の漢詩部分のみ臨書しています。大学生になってこの作品に出会い、お気に入りになりました。



21

戸髙海　四回生
創作　行草　『正気歌』　巻子

「天地有正氣，雜然賦流形。下則爲河嶽，上則爲日星。於人曰浩然，沛乎塞蒼冥。皇路當清夷，含和吐明庭。時窮節乃見，一一垂丹青。（以下略）……」

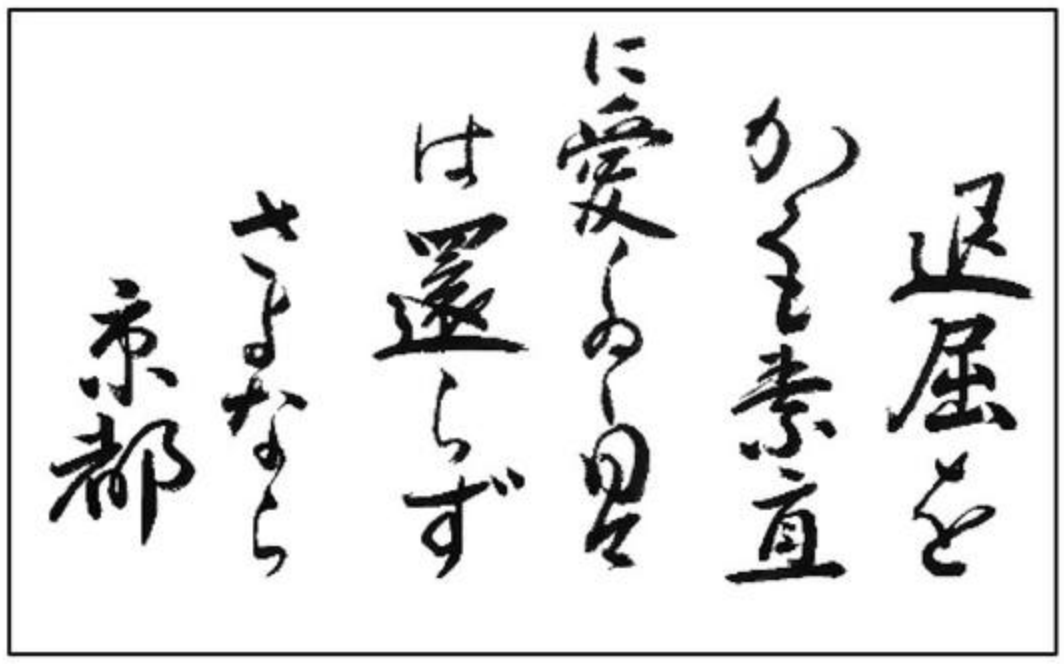
力強く、繊細に。

20

高石京花　四回生
創作　調和体　『さよなら京都』
半切
1/2
横

「退屈をかくも素直に愛しゐし日々は還らずさよなら京都」

歌人・栗木京子さんの歌集『水惑星』より。祖母から借りた歌集で、一番心を揺さぶられました。自分の書道部生活の集大成です。



22

中野花音　一回生
臨書　隷書　『臨古四種巻』　横:半切三分の二　縦:六尺(約24cm×180cm)

「先生諱泰。字林宗。大原介休人也。其先出自有周。王季之穆。……」

上手にできました～～。





23

乗杉玲壽　四回生

創作　行草　『流転』　巻子

「靡靡秋已暮　凄凄風露交　蔓草不復榮　園木空自凋　清氣澄餘滓　杳然天界高　哀蟬無留響　叢鴈鳴雲霄　萬化相尋繹　人生豈不勞　從古皆有沒　念之中心焦　何以稱我情　濁酒且自陶　千載非所知　聊以永今朝」

無常の心を表しました。

24

樋口珠穂　一回生

創作　行草　『平家物語』　全紙



「祇園精舎の鐘の声、諸行無常の響きあり。沙羅双樹の花の色、盛者必衰の理をあらはす。おごれる人も久しからず、只春の夜の夢の如し。」

アニメ「平家物語」の主題歌「光るとき」の「永遠なんてないとしたら、この最悪な時代もきっと続かないでしょう」という歌詞に感動して制作しました。ただ儚く、虚しいだけじゃない。穏やかな人生の有り様を表現するためにかな作品っぽさを意識しました。



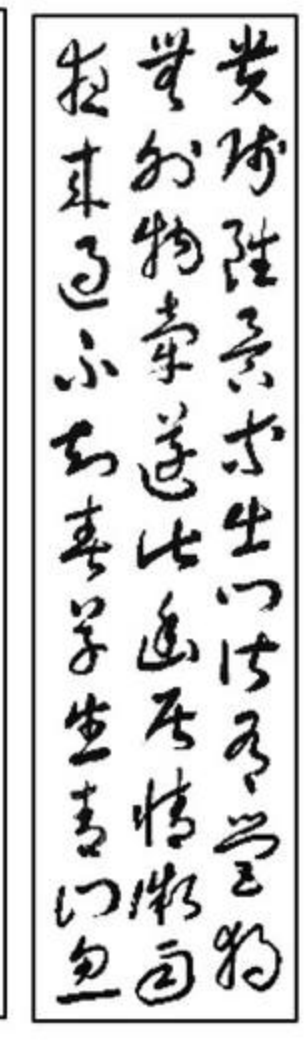
25

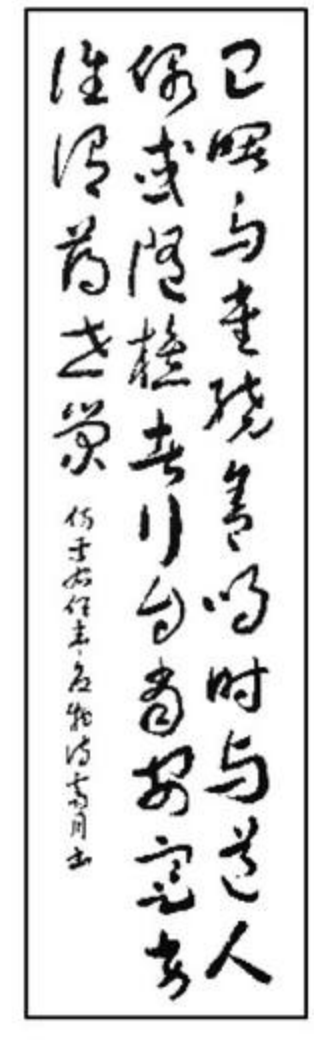
松阪明日香　二回生

創作　草書　『幽居』　半切二聯

「貴賤雖異等、出門皆有營。獨無外物牽、遂此幽居情。微雨夜來過。不知春草生。青山忽已曙、鳥雀繞舍鳴。時與道人偶、或隨樵者行。自當安蹇劣。誰謂薄世榮。」

于右任の草書で創作しました。素朴な魅力が伝われば幸いです。





26

松田陽南子　一回生

臨書　楷書　『多宝塔碑』　半切

「大唐西京千福寺多寶佛塔感應碑文。南陽岑勛撰。朝議郎判尚書武部員外郎琅邪」

初めて楷書作品に挑戦してみました。圧倒的に整った字形を再現するのは非常に難しかったですが少しでも近づけることができていれば嬉しいです。



27

凌楡凱　四回生

創作　草書　『落雨嗰花壇』　全紙

「夜頭、天落雨。暗、瀴、靜。獨個人濯雨、走同歸去嗰路高頭。落雨日腳、看勿出影。旁邊頭無有一些光、弗曉得自嗰魂。是冷瀴、或是弗暝。空牢牢哉、自撥自濯濕。是有趣哉、自弄自弄煞。前頭冒嗰夜頭、是是也是介。我牢早無有數哉、也委再記起來、也耍再去尋。落雨、落雨，落雨。咋咋咋咋、刷刷刷刷、閘閘閘閘、塞塞、石石。」



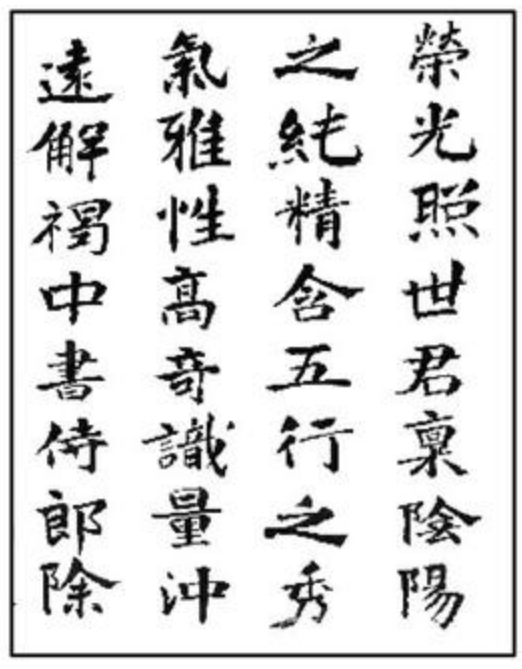
呉語失恋詩その二です。失恋して一ヶ月、一人で雨の降っている夜の公園に座り、昔のこと色々回想しながら、一人で哀傷に苦しむ。自分の気持ちを現代呉語口語を基とした詩で表し、呉語の言語芸術を表しながらも、草書で自分の気持ちを表現し、色々拘る一作です。（作者の母語は呉語です）

28

吉田慎二郎　一回生

臨書　楷書　『張玄墓誌銘』　全紙

「榮光照世。君稟陰陽之純精。含五行之秀氣。雅性高奇。識量冲遠。遠解褐中書侍郎。除南陽太守。嚴威既被。其猶草上加風。民之悅化。若魚之樂水。方欲羽翼天朝。抑牙帝室。何圖。幽霊無簡。殲此名哲。春秋」



線の太さを意識する楷書を選びました。

29

渡部裕貴　修士二回生

創作　行書　『月夜見梅華』　全紙

「月耀如晴雪　梅花似照星　可憐金鏡轉　庭上玉房馨」

せっかくの二月開催の書展なので梅の花についての詩を書いてみました。

30

鶴岡直穂　三回生

臨書　隷書　『鄭盩　楊巨源・酬于駙馬』　全紙

「綺陌塵香曙色分、碧山如畫又逢君。蛟藏秋月一片水、驥鎖晴空千尺云。戚里舊知何駙馬、詩家今得鮑參軍。　陽和本是煙霄曲、須向花間次第聞。」

自分にとっては作品づくりが都度大挑戦なので、今回も法帖の味を再現できるように頑張ります。

31

松岡加純　二回生

臨書　隷書　『礼器碑』　半切

「百王不改。孔子近聖。爲漢定道。自天王以下。至于初學。莫不騭思嘆卬師鏡。顔氏聖舅。」

やっぱり隷書が好きです。



32

乾未樹　修士一回生
創作　楷書　『花を惜しむ』　聯落

「半生行路苦辛身　幾度迎春還送春　節物忽忽留不止　惜花人是戴霜人」
時間はあっという間に過ぎ去ってしまう中で、この一瞬に集中し、一点一画を丁寧に、ただ丁寧に書くことを意識しました。



合作

33

妹尾直弥（一回生）、齋藤亜紀（二回生）、戸髙海（四回生）
臨書　草書　張瑞図『飲中八仙歌』
二・六尺×六尺

「知章騎馬似乗船　眼花落井水底眠　汝陽三斗始朝天　道逢麹車口流涎　恨不移封向酒泉　左相日興費万銭　飲如長鯨吸百川　銜杯楽聖称避賢　宗之瀟洒美少年　挙觴白眼望青天　皎如玉樹臨風前　蘇晋長斎繍仏前　醉中往往愛逃禅　李白一斗詩百篇　長安市上酒家眠　天子呼来不上船　自称臣是酒中仙　張旭三杯草聖伝　脱帽露頂王公前　揮毫落紙如雲煙　焦遂五斗方卓然　高談雄弁驚四筵」
張瑞図ってメジャーですよね。

34

加藤杏次郎（一回生）、中野花音（一回生）、妹尾直弥（一回生）
創作　雑書　創　『萬楚　五日觀妓』　二六

「西施謾道浣春紗　碧玉今時闘麗華　眉黛奪将萱草色　紅裙妬殺石榴花　新歌一曲令人艶　酔舞雙眸斂鬢斜　誰道五絲能續命　却令今日死君家」
好きです。大好きなんです。



35

木村隼翔(三回生)、城本昌明(三回生)、須田光太郎(三回生)
創作　隷書　『歳月不待人』　半切三聯

「歳月不待人」

三人で一つの詩文を三種の隷書体で各々自由に書きつつ、調和させました

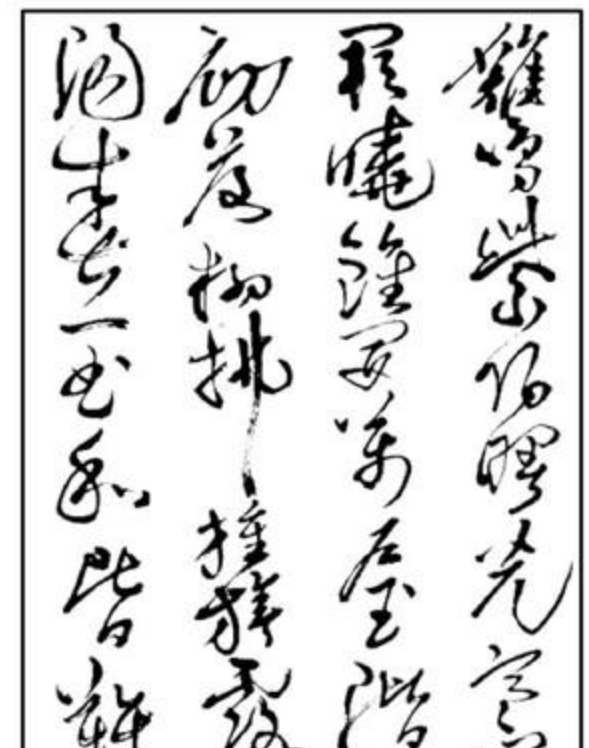


36

妹尾直弥（一回生)、松田陽南子（一回生)
臨書　行草　陳淳『七言律詩幅』　二六

「鶏鳴紫陌曙光寒　鶯囀皇洲春色闌…」

行草を書くのが好きです。もう第二弾ですね。早い。



37

植村亮(二回生)、齋藤亜紀(二回生)、永田はるな(二回生)、松阪明日香(二回生)
創作　楷書、隷書、行書、草書　『孤月照寒泉』　八つ切り四聯

「孤月照寒泉」

部長・副部長の合作です。各々の好きな書体で同じ詩文を描きました。









39

浅山桃佳(三回生)、浅雛穂乃花(三回生)、大林明日香(三回生)、鶴岡直穂(三回生)、二宮海椰(三回生)

創作　楷書、隷書、行書　『譜莉宮亜伍』　全紙

「大いなる希望の力　情熱の赤い炎　はじける檸檬の香り　安らぎの緑の大地　知性の青き泉　希望の力と未来の光　華麗に羽ばたく5つの心　Yes!プリキュア5」

みんなで楽しく書きました!♡



40

影山稜真（一回生）加藤杏次郎（一回生）川上雪乃（一回生）鈴木理仁（一回生）妹尾直弥（一回生）中野花音（一回生）樋口珠穂（一回生）福田朗子（一回生）松田陽南子（一回生）吉田慎二郎（一回生）

創作　雑書体

「漢字しりとり」　半切

蛸墨汁物品薄氷水流弾丸腰痛手腕前輪投下山健



38

岩田恵理子(修士二回生)、乗杉玲壽(四回生)

創作　篆書　『牡丹』　全紙

「牡丹」

牡丹の花言葉は「王者の風格」です。



41

岩田恵理子(修士二回生)、服部佳乃子(修士二回生)
創作　行草　『題安成李氏秀野亭』　短冊二連

「美花修竹隨時勝。流水青山繞屋春。」
卒業は悲しいですが、良き春となるように願って書きました。



42

加藤杏次郎（一回生）、植村亮（二回生）、城本昌明（三回生）、乗杉玲壽（四回生）
創作　篆刻　『四四字熟語』　色紙

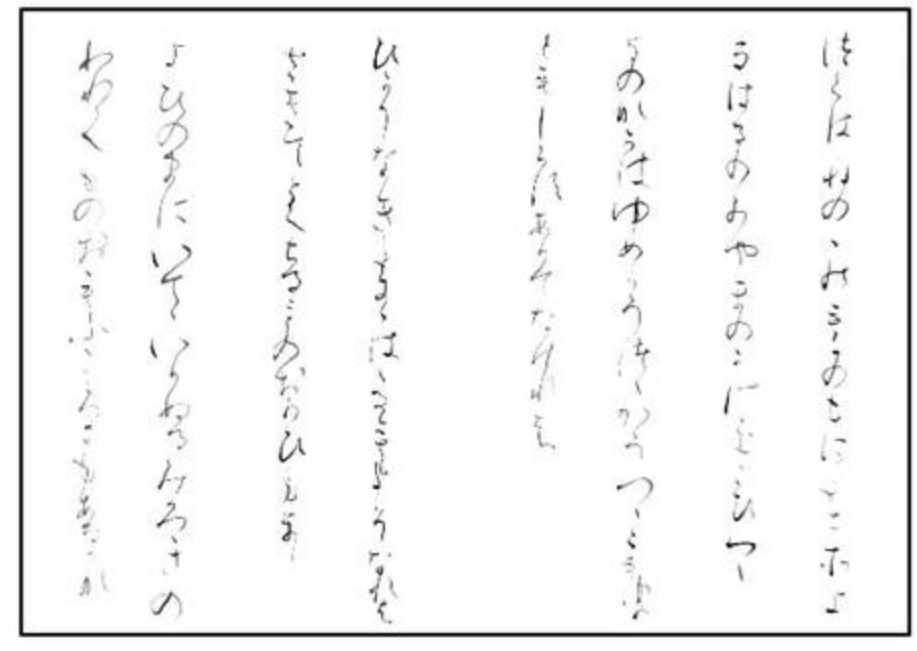
「燕雁代飛　酔生夢死　明鏡止水　不立文字」
それぞれの好きな四字熟語を刻しました。



43

植村亮(二回生)、山田健太(二回生)
臨書　かな　『高野切』　色紙

「宵の間に出でて入りぬる三日月の割れてもの思うころにもあるかな。世の中は夢かうつつかうつつとも夢とも知らずありてなければ。つくばねの木のもとごとに立ちぞ寄る春のみ山のかげを恋つつ。光なき谷には春もよそなれば咲きてとく散る物思ひもなし。」
高野切から二人の好きな歌を書きました。



44

加藤杏次郎(一回生)、凌楡凱(四回生)
創作　楷書　『二等分の五月』　半切の半分

「碧苑盪蜩韻　綠蔭漏盛陽……」
五月（音：ゴガツ　訓：いつき）は非常に麗らかです。



45

加藤杏次郎（一回生）、妹尾直弥（一回生）、中野花音（一回生）、松田陽南子（一回生）、吉田慎二郎（一回生）

臨書　草書　張旭『草書古詩四帖』　一六

「東明九芝蓋　北燭五雲車　飄颻入倒景　出没上煙霞…」

カラフルで面白い作品です！目がまわりそうになりました。最大限の真面目です。よきかな～。つらつらと。

46

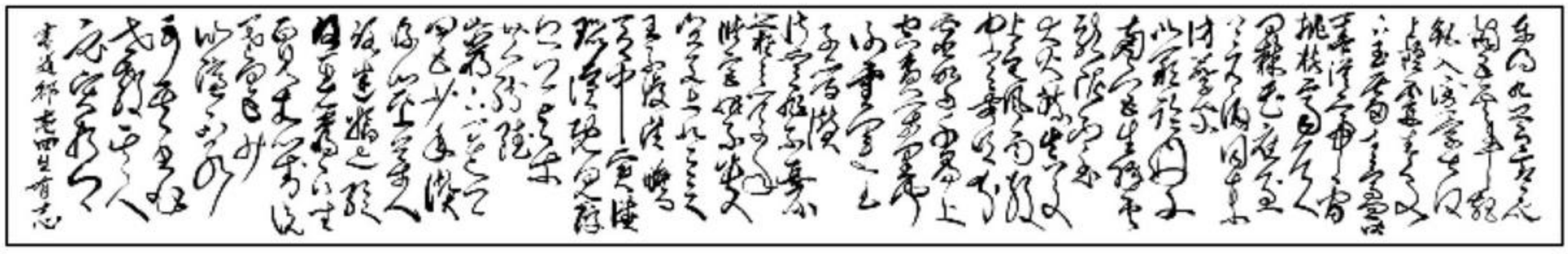
乗杉玲壽(四回生)、戸髙海(四回生)

創作　行草　『二君子図』　全紙

「春水満四澤　夏雲多奇峰　秋月揚明暉　冬嶺秀孤（「四時」陶淵明）　独坐幽篁裏　弾琴復長嘯　深林人不知　明月来相照（「竹里館」王維）」

まつたけです。





47

飯田のぞみ、石田あかり、大西沙穂、岡雅博、倉橋あい、髙石京花、戸髙海、乗杉玲壽、凌楡凱(すべて四回生)

創作　雑書体　『卒業記念』　全紙

「省略」

書道部での日々を振り返る。

48

石田あかり、倉橋あい、戸髙海、乗杉玲壽(すべて四回生)

創作　行書　『四人文殊』　全紙

「四人文殊」

四人寄れば文殊の知恵。　いろんなことがあったなあ…。

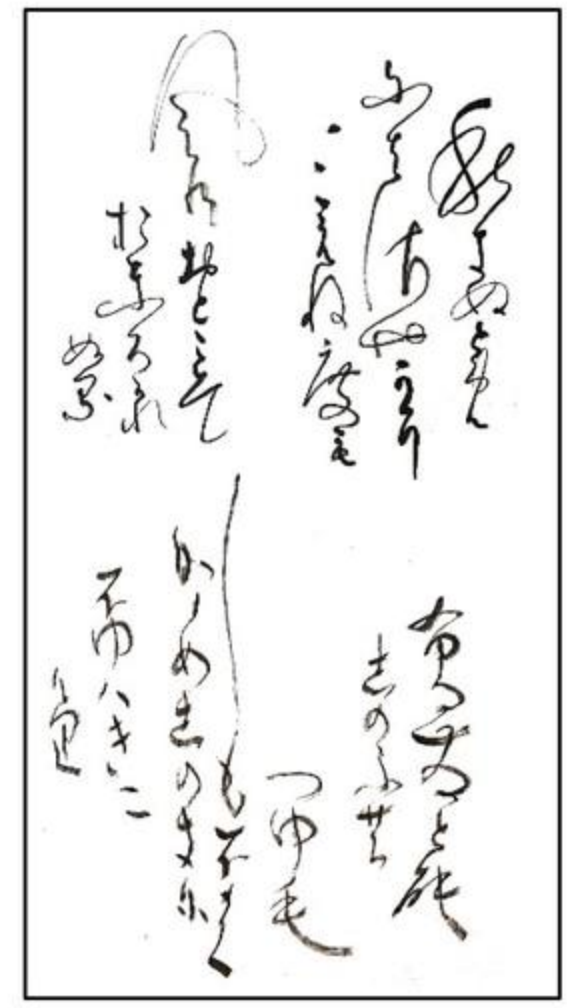


49

岡雅博（四回生）、戸髙海（四回生）
創作　かな　『秋冬仮名合作』　全紙

「秋来ぬと目にはさやかに見えねども風の音にぞおどろかれぬる　ふるさとのしのぶの露も霜ふかくながめし軒に冬は来にけり」

秋の訪れと冬の訪れを詠んだ和歌を書きました。

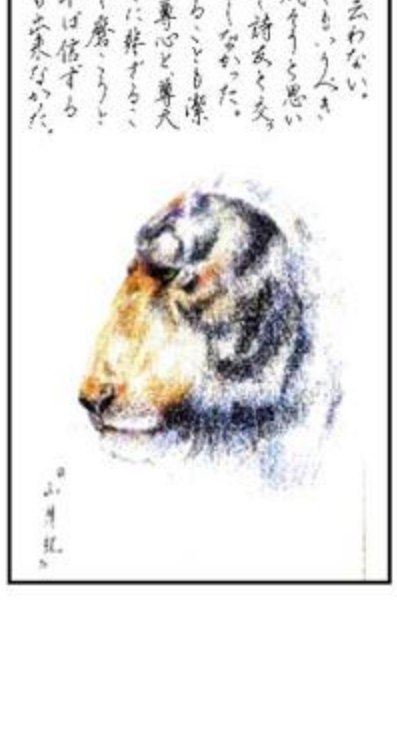


50

南出祐希(三回生)、永田はるな(二回生)、結依(二回生)
創作　硬筆　『山月記』　便箋三枚

「時に、残月、光やかに、白露は地に滋く、樹間を渡る冷風は既に暁の近きを告げていた。人々は最早、事の奇異を忘れ、粛然として、この詩人の薄幸を……」

初夏書展に続いて今回も硬筆合作をしました。冬の書展ということで、寒そうな雰囲気の作品を選びました！じゃあ虎の絵も描きたいね、ということで作品に沿った絵も加えました！



51

永田はるな(二回生)、山田健太(二回生)
臨書　行書　董其昌『邠風図詩巻』　全紙

「玉書金簡不足異。布帛萩粟真文字。委宛驚開先代藏。詩』

二人の「いつか書いてみたい」が一致したので始動した合作企画ですが、気づけば「いつか」が一年後になっていました。董其昌のどの作品を書くかも、構成も、ひたすら右往左往した結果、これに落ち着きました。



52

乾未樹(修士一回生)、釜田弘一朗(五回生)、近藤毅(五回生)
創作　行書　『極娯遊』　半切

「極娯遊」

学生生活、最後までふんだんに楽しみ切ろうという決意の書です。



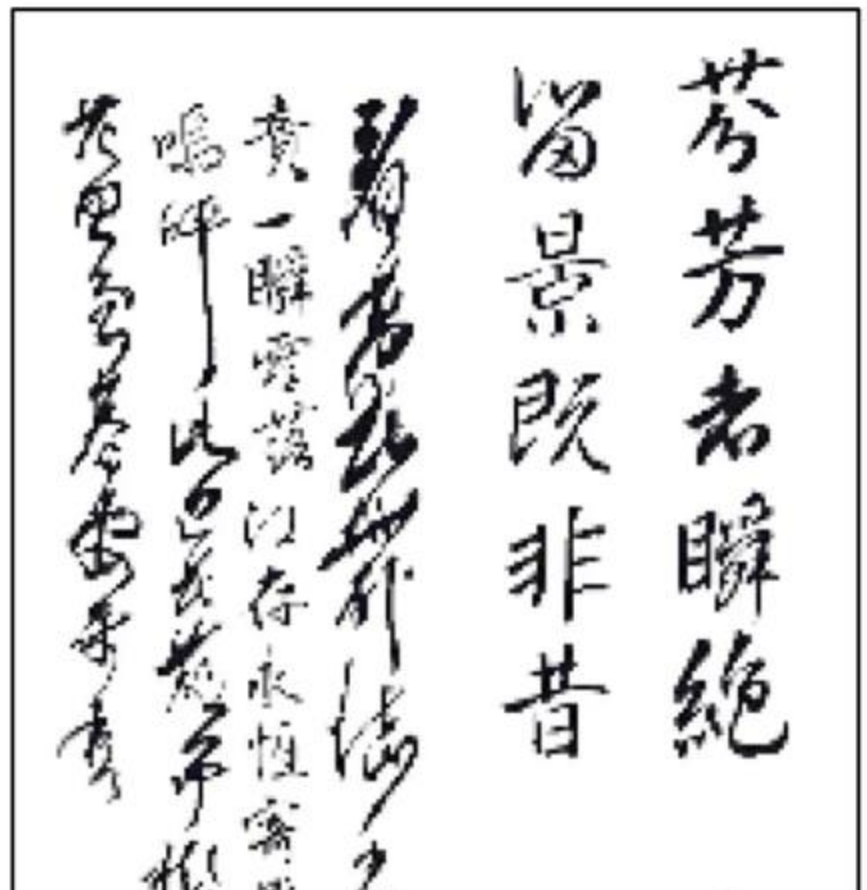
53

凌楡凱(四回生)、須田光太郎(三回生)

創作　楷書と行書　『花下對詠』　全紙

「(詩文のみ)【素鴻】芬芳者瞬絶、零別者長存。留景既非昔、以何傾我魂。【景仁】已散望還盛、既非者有殘。勿唯留在景、宜又果新觀。【素鴻】英謝須重待、于輪廻奈何。惟夫音香聊勝滅、則盍躍光歌。【景仁】落花悲昔在、夫勿忘遺豐。憶已舞俱語、當愉迎再隆。」

花がいずれ散ってしまうのに、なぜ期待するのだろう。桜の話から恋の愁傷の話へ、素鴻と景仁が詩を詠みながら心の会話を交わしている。内容は全て自作のものです。中古音の音韻を忠実に踏んだ漢詩の対詠に漢文の会話があり、内容も書道もこだわった一作です。全霊を捧げて出来上がった作品なので、ぜひご品読ください。



54

パクジヨンと有志

臨書　楷書　『九成宮醴泉銘』　半切

「九成宮醴泉銘…」

それぞれの字の担当を決めて、合作をしてみました！



【顧問・部員紹介】

顧問：京都大学大学院文学研究科准教授　成田健太郎

京都大学附属図書館　図書館企画掛主任　行友三輪子

技術顧問：日展会友　書家　大原蒼龍

一回生

京女　岩﨑　沙奈
工　影山　稜真
工　加藤　杏次郎
法　亀井　歩武
京女　川上　雪乃
工　鈴木　理仁
農　妹尾　直弥
工　寺田　大起
農　戸邊　晃平
同志社　中野　花音
総人　樋口　珠穂
文　廣田　千裕
農　福田　朗子
農　松田　陽南子
医　吉田　慎二郎

二回生

総人　植村　亮
薬　GONG　ZIQING
総人　齋藤　亜紀
文　永田　はるな
理　中野　葵
総人　松岡　加純
農　松阪　明日香
阪大　水嶋　蒼来
工　宮原　康輔
医　山田　健太
文　リー・イーウェイ

三回生

農　青山　尊
薬　淺雛　穂乃花
経済　浅山　桃佳
農　大林　明日香
医　木下　美優
文　木村　隼翔
医　小谷　大翼
文　坂田　侑美奈
文　城本　昌明
文　須田　光太郎
農　鶴岡　直穂
法　中西　結希乃
総人　二宮 海椰
文　南出　祐希
工　山下　理子
薬　由里本　陽香
理　渡辺　紗英

四回生

教育　飯田　のぞみ
法　石田　あかり
文　大西　沙穂
兵医　岡　雅博
理　倉橋　あい
理　凌　榆凱
文　髙石　京花
農　戸髙　海
理　乗杉　玲壽

五回生

医　釜田　弘一朗
医　近藤　毅

修士一回生

農　乾　未樹
農　Yu Kai-Le

修士二回生

農　岩田　恵理子
農　柴田　達哉
農　服部　佳乃子
工　渡部　裕貴

博士一回生

理　吉田　凌祐

博士二回生

理　中村　勇真

日研生

ANDELA JOVANOVIC
KOVAIS DOMINIKA
ハウ・ジェイソン

研究生

文　宋暁萌
工　CIROZLAR IBRAHIM
法　ボヌボ・マティルド

書道用品と表装・額装 書遊

充実のECショップ 書遊Online 書遊 検索
ポイントがとってもお得なオンラインショップ https://shoyu-net.jp/

書遊奈良本店 〒630-8243 奈良市今辻子町３７
TEL.0742-23-5547／ FAX.0742-20-2261
書遊大阪店 〒553-0003 大阪市福島区福島 5-14-6 クレセントビル 2F
TEL.06-6458-8808／ FAX.06-6456-4077
書遊京都店 〒604-8132 京都市中京区高倉通三条下る丸屋町 164
TEL.075-251-7800／ FAX.075-251-7802

LINE 公式アカウント
お得なクーポン、SALE情報の配信！
道具の豆知識を共有！得すること間違いなし。
「友だち追加」で QRコードを選択！
書道が楽しくなる！

青緑堂山中表具店

〒604-8102
京都市中京区姉小路富小路西入ル菊屋町567
TEL：075-221-3381 FAX：075-252-1987
https://www.yamanaka-hyouguten.com

京都・書道用具店
松楳園

一般用の書道道具からプロ専用の用具まで幅広く取り扱いしております。小売もしておりますので、お気軽にお越し下さい。

取扱商品
書道用具全般
毛筆・松楳園製
毛筆・中国製
墨・墨液 各種
紙・漢字・かな用
硯・下敷・印材
他・書道小物
水墨画用具

京都市下京区柳馬場通仏光寺下る万里小路町164
TEL 075-351-6380 FAX 075-361-8006
http://www.shoubaien.co.jp 定休日(日・祝日)

香雪軒

京都二条 銘筆・名硯・古墨・文房四寶の店

〒604-0912 京都市中京区二条通河原町東入ル
桶之口町474番地
営業時間 10:00-19:00（不定休）
Tel 075-231-1695
Mobile 090-3495-4060

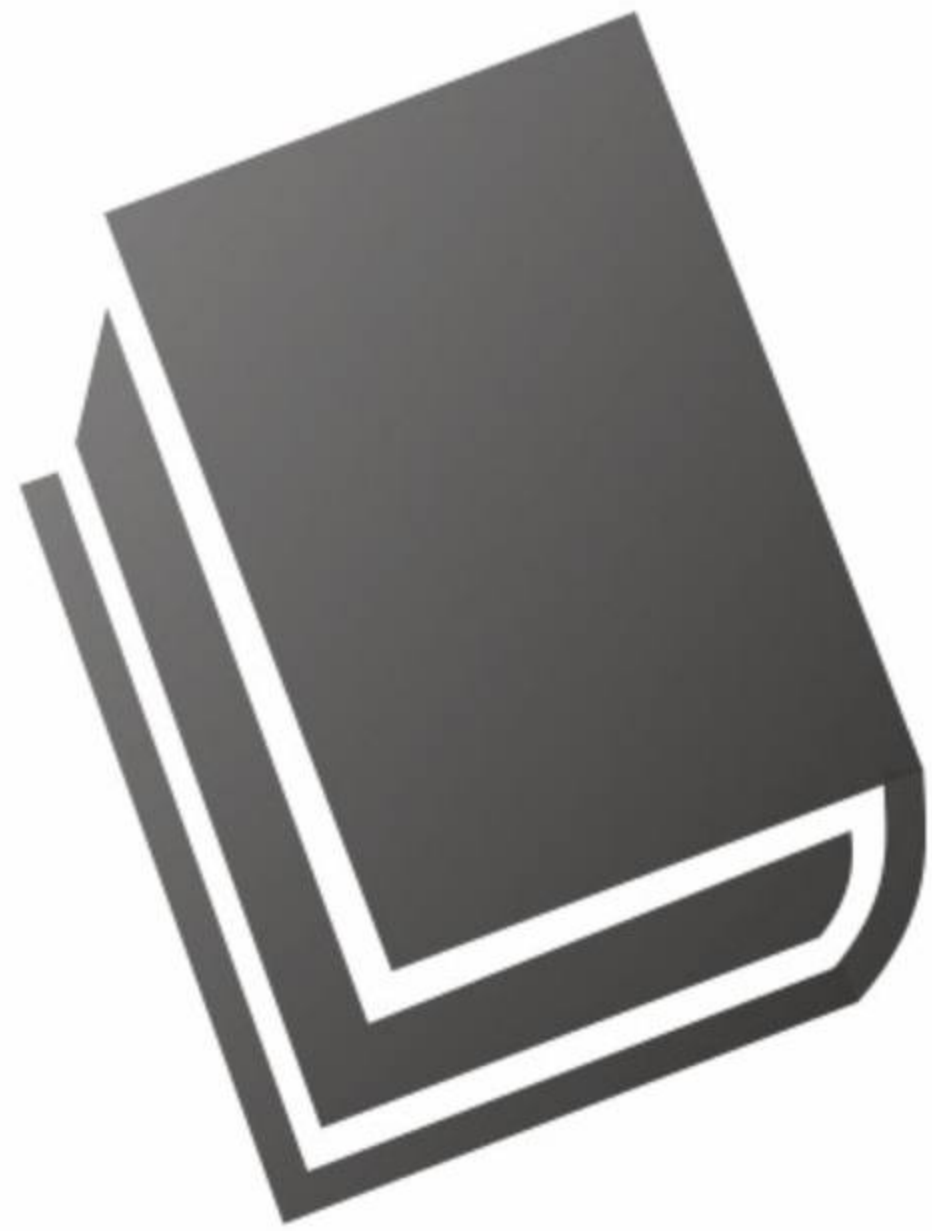
文房四寶(筆・墨・硯・紙)和紙工芸品 書画作品

書芸サロン 贊交

株式会社 贊交社
〒605-0992
京都市東山区鞘町通七条上ル下堀詰町 242
TEL/075-541-1112 FAX/075-541-1113
E-mail/info@shoga-sankou.co.jp

本書展開催に際しご協賛を賜りました。

心よりお礼申し上げます。



This book was
made by the LeME